

## 〔特別展によせて〕

## 浮世絵の名品を選んで

太田記念美術館学芸課長 永田 生 慈

昨今、浮世絵ブームといわれ、本年も大がかりな展覧会が企画進行中のようにあります。それはそれで浮世絵の啓蒙という面で、よろこばしいことですが、少々気がかりなこともあるのは事実です。周知のように浮世絵というと、誰もがあの色彩の美しい浮世絵版画を想起することでしょう。全く現今では、浮世絵の版画こそが、この分野を代表するものといった、解説を加える専門家がいろいろあります。果してそうでしょうか。敢て異をとるわけではないのですが、このような浮世絵版画偏重主義では、かえって啓蒙という主旨とは逆の方向へ進んでいると思えないからです。つまり私がいいたいのは、十全な浮世絵の理解をふかめるためには、もっと幅広い視野から捉えるべきではないかということです。浮世絵の最大の魅力は、江戸初期の幕藩体制確立時に、様々な拘束下で、狩野派や土佐派などが風俗図の分野から離れていた時、そのような趨勢に逆行するかのようになり、自由潤達に時世粧を描き続けたという点にあるのではないのでしょうか。かような立場であったからこそ、浮世絵は何も版画に拘泥して発展したわけではないのです。それは浮世絵版画は勿論のこと、版本の挿絵や肉筆画などにも作域は及んでおり、まさに総合的な絵画分野であったとい

絵本・舞台扇 勝川春章・一筆斎文調筆



わねばなりません。だからこそ、近世絵画の中で浮世絵は極めて魅力的なものであり、このような経緯こそ再認識すべき時期なのではないでしょうか。以上のような主旨にそって、今回の展覧は幅広い作品選択を行なったわけであり、ここで少しく肉筆画、版画、版本、扇と順を追って主な内容を紹介してみることにしましょう。

肉筆画は、寛文期の「布晒女群像」から、明治の小林清親「源氏物語浮舟之巻」まで、22点で肉筆浮世絵の変遷を窺うことができるよう構成されております。特にこれらの中でも、菱川師宣の「遊女物思いの図」をはじめ、奥村政信「布袋と美人」「見立芦葉達磨」「見立普賢菩薩」3幅は今回初公開の優品であります。また、大阪で独自の作画活動を展開した月岡雪圃の作品が2点含まれているのも、江戸肉筆浮世絵と比較できる点、興味ぶかいものがあります。

浮世絵版画は、はじめ墨一色の墨摺絵から、丹絵、紅絵、漆絵と筆彩版画の時代が続き、数色のみ色摺版画である紅摺絵が考案されます。それが明和2年(1765)、鈴木春信らによって多色摺の錦絵が完成されて、浮世絵界は最も高揚した時代を迎えました。特に天明から寛政年間(1781~1801)にかけては、鳥居清長、喜多川歌麿、東洲斎写楽といった版画における

林間煖酒焼紅葉(部分) 鈴木春信筆



遊女物思い 菱川師宣筆



文読む美人 細田栄之筆



市川蝦蔵の竹村定之進 写楽筆

大家が輩出し、これに続いて葛飾北斎、歌川広重などの活躍がみられました。ここでも、このような流れを概観できるような作品選択がなされています。墨摺絵では、鳥居清信の「風流かみゆひ」。紅絵(漆絵)は、二代鳥居清信の「初世萩野伊三郎の曾我五郎」。紅摺絵では奥村政信「足袋の紐」。錦絵では勿論、鈴木春信の作品であります。さらにその後も、各時代を代表する作品によって年代や特徴を追うことができますが、近代に入って月岡芳年や小林清親、井上安治、小倉柳村とその終焉期を飾る絵師たちにも、スポットをあててみました。

版本も浮世絵師たちにとっては、最も重要な仕事のひとつでありました。当然、絵本挿絵本共に遺存するものは膨大な数量に達していますが、浮世絵版画と比べると、調査研究はやっと進展しつつあるというのが実状であります。今回は会場の都合もあり、代表的な3点を選んで出陳することにしました。菱川師宣の『大和侍農づくし』は、挿絵家として高い評価を得ていた彼の著名作品であるというばかりか、稀覯に属する点でも貴重なものといえます。勝川春章と一筆斎文調の合作になる『絵本 舞台

扇』は、浮世絵全史を通じて最も傑出した役者絵本として著名なものであり、全図に漲る芸術性の高さは他の追随を許さないものがあります。三代歌川豊国の『俳優素顔 夏乃富士』は、すでに勝川春章によって前蹤があるものの、その発想は極めて面白いものといえます。つまり、夏の富士とは雪をかぶらない素顔の富士という意味で、俳優素顔という角書の通り、人気スターの日常の様子を描いたものです。三代歌川豊国ならでは作品といえましょう。

最後に、12点も出陳した、肉筆扇についても触れておくべきでしょう。通常、骨の付いたままの扇は日常の涼をとる道具として、多くは現存していないものです。その点、今回のものは大阪の豪商鴻池家がコレクションした約千点の中から選ばれたものであります。伝来品ということから、その何れもまれにみるほど保存は完好で、往時の賦彩をそのままに伝えているものといえます。特に関西での蒐集ということから、京都の西川祐信や、大阪の墨江斎の作品も含まれていることも貴重なことだといえましょう。このコーナーでは、何げない道具にすら、浮世絵師は意外なほど精神をこめて作画していることに注目したいものです。

季刊 美のたより No.70

昭和60年2月21日

発行 大和文華館